繪本故事談

八止

E
13
8

逍遙文庫
文庫6
25
8

繪本故事談巻之八目録

汲黯　袁宏
夢彭祖　陸機
智永　光武帝
曾子　彌子瑕
孫叔敖　卞莊子
顔基　青砥左衛門
韓国侍　清少納言

為憲
博雅
生駒仙
趙西
鳳逢鳩

伝國
基氏
伯道乃恭
狄仁傑

張女故事談卷之八

汲黯　史記

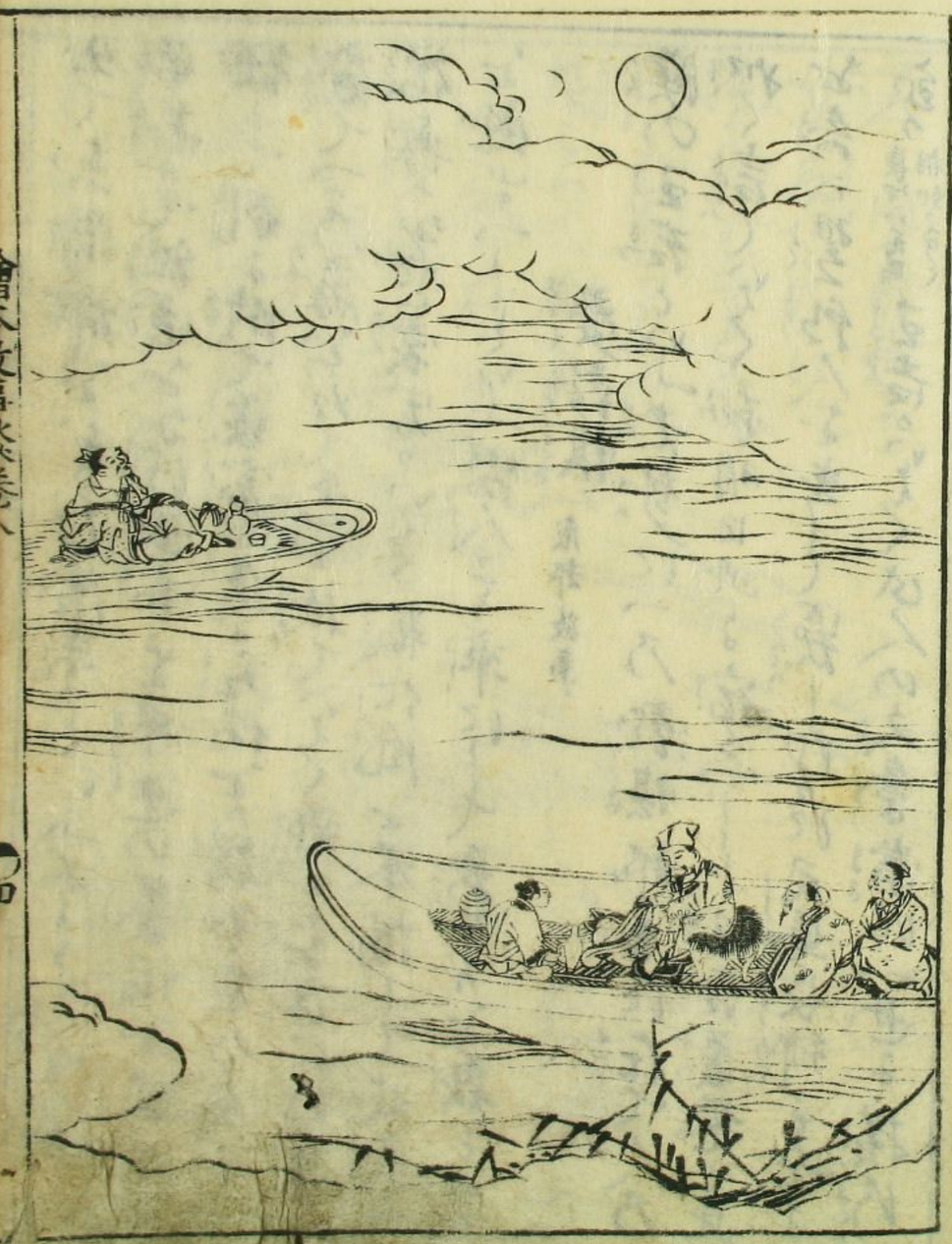
漢の代乃汲黯字ハ長孺濮陽の人なりしを先祖戰国乃衛の君に仕へしく冠よりあつれり汲黯より元まで十代世卿大夫なりしが孝景の時大子洗馬の官となり嚴と以て人を恐怖らしむ武帝即位有て淳老の友と共に河内郡に火を失して不仁家を燒武帝汲黯を往てこれを況せしむ汲黯返て賛て曰民家火を失して屋比く延燒しかば是豪の所に焼ける河内郡の貧人湯水大旱に傷る者万余家にして或ハ子を鬻し況を害し粮を相命ふ況や君ハ節を奉じ使を持て此よりて

文庫6
25
8

して使冠かれと云ふ節を持て新みりと矯河国新の
倉の碧水と発く冥氏を振ひそこの節を持して帰り
飛よ伏せて出んと武清よ武帝彼の勇に換て氏を
志と感じて新の浸よを爵邦尉の友と分て九郷
に列に政治の勢ハ是乃ち是を次し大神を引て文
法を拘られ性を己が正出ちに振く人の過を容ること
能いに天をも教徒ハ久しく伝よ振ひて武
帝を直と云く太を存くすを感じて直よ社
稷の臣おわ今汲蹠の如きハあれよ近しとのの一つを
比の大将軍衛青よハ剛よ有ちても遇丞相公孫弘よ
い冠ちを見へよ見へよ汲蹠よハ神を正して逢のりとちわ

袁宏　晉書

晉の袁宏字は彦伯陳郡の陽夏の人なり秀才
有て文章を能義かわけに謝尚といふ人牛渚の詩をうた
秋の夜の白かく月の色に感じて詩をうたんの近所を引連て
ぐし紀行をうたふ袁宏も舟をおろして小船に
棹て昔を思ひ祖孫よりこと於て清潔に辞文藻接し
謝尚これを聞て斯豪逸なる者べきよわざと色受て人を遣
問しむるに宏及ふ袁宏即り命じて速て面を接じ無に
優渥ありて宏を叫て面白く申日まで麻に見ん
名誉日に高ちわ又謝安も是に袁宏の機對辯
速なるを賞すなを謝あ桓温の判更とうわ袁宏も

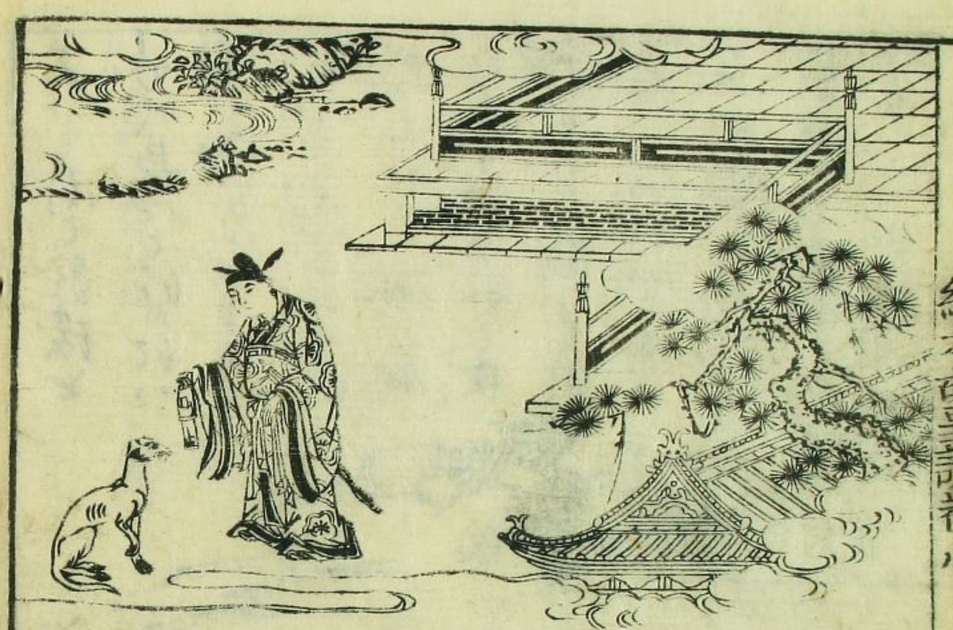


出て東陽郡をおさむ治亭といふ所の賢者
皆集りて祖道をかなしむ謝安を平速の答話を試んと
欲して別を作て袁宏がもとに送りたるに
顧て一乃を見れて色を校ていとく卿の才あに此猛
猛興のあるを袁宏がいとく報仁風を拳揚して彼熱腸
を感ずべしといふ時の人これを率にして感なりと歎たり

夢彭祖　成都故事

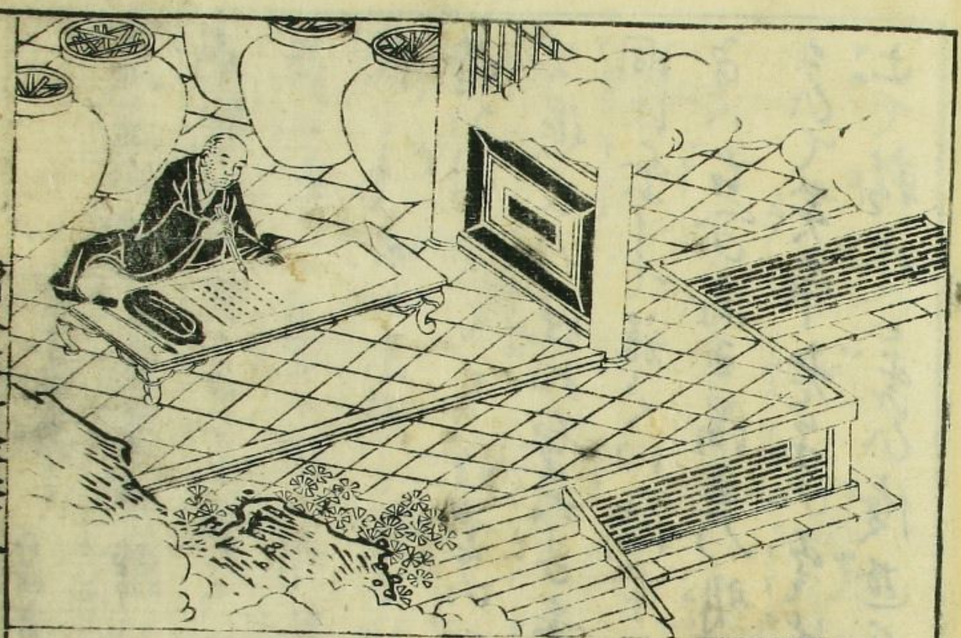
漢の王吉といふ若梦に一乃彭祖都亭に在て人乃
如く言ていとく明日此を宿べしと王吉覺て此
を奇こ望て人を遣して窺しむるに司馬長卿主ありよ
初め長卿八月馬相如ありて王吉がいとく此人の文章當に一世を横行

すべし同て彭祖を
頼て長つとしたのにハ
撰ようの者ありとて
王吉が文章を天下に
撰らわて廣く成
らんとあわ故ようと長
卿を以て嘲の吳
名をに相如ら第
卓文君一生の用
彭祖を合さわ
しとたり



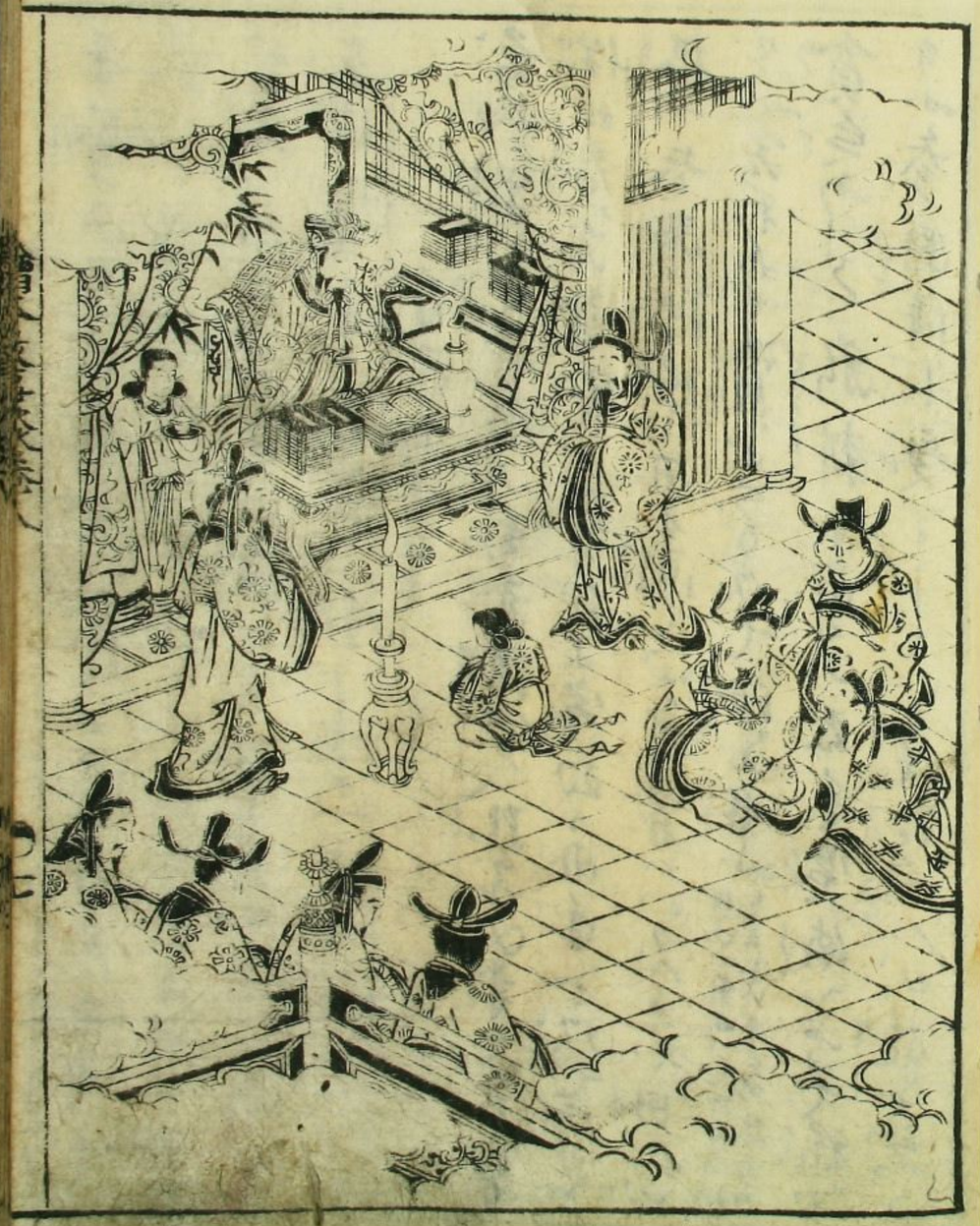
陸機 附黄耳 萬世統譜

西晉の陸機字は士衡呉の
長七代にして久章世に冠
たり其父陸雲六品に歩む
文を能くし兄と名を齊くし
後に成都の王穎謀反のと
き坐せらるゝ人ありて捕ひ獄
吏大に怒り黄耳と陸機
洛陽に在時書を竹筒に納て
頸に繫て故里に使すを放
川人に求るに如しして洛陽



智永 尚書故實

陳の永興寺の僧智永
書法の人なり王逸少
九世の孫なり書を能逸少
に学ひて能書の名
あり毛筆をつゝて勤め
勵むこと久し秃筆数石を
入る甕中なり故に埋み
後ち此を地に瘞て鎖
塔といへり



光武帝　後漢書

後漢の初光武皇帝諱ハ秀字文叔京帝七世の孫南頓乃令歙の子なり新乃地皇三年に兄の劉演と義兵を起して遂に伯父の都を洛陽に作り漢の代を興して赤と称ず後漢の帝改乃のいまゝ西公に良將を引て赤ぐ緯書の讖を稽し和氏を白て皆遂に乃寐ね皇太子帝の勤労して岸ゝをこて同に楽して諫く曰陛下精を勵して天下を治ゝ治ハ古への高を陽乃明あり我れとも孔神労を過ひて賢帝老子の壽生乃長を閑し孔くハ学文を止て精神を苦ひ優遊して自寧しのことあ也て

帝そのかミ孝經書の義理を説て味深くして
樂へ一説にと講説す痛わらに紙に說の如く
学文をを好みて没事に怠なし故に天下大学にして
東漢二百年乃業を記します

曾子　鄒魯故事

曾參字ハ子輿魯の南武城の人孔子の弟子なり
性至孝にして嘗出て薪を採に客到る母手を以て臂を
搔つ参忽地て母ニ問て、いたく臂ハいかんそや母の曰
客ありて臂をとり以て汝を呼ふ（母子一気にして其通ひの理あり）
貧にして耕す魯の君其賢徳を聞て禄を
あたふ参固辞して受ずしていはく吾聞人の施を受る

ものハ常に人を畏る人
に恵を与ふる者ハ常に
人に驕るといへども君驕る
ことなくて吾に驕らハれ
とも吾豈よく畏るゝ
なからんやとて遂に受ず
嘗て瓜を耘るに
誤りてその根を斬る
父曾晳怒て杖を
以て其背を撃ければ
参地にたふれて頓く

有て是つゝ琴を數て歌うたふく父母を和を祈
ふうんと歌ひ孔子これをきて門人に謂て曰く參
来て是に因て奏ぜよ身を思ひ色を父を不義
に陷ん孔不孝熟かされすわ大なんと若し逆
孔子うり造て過を謝をわ

彌子瑕 史記

衛の彌子名は瑕は靈公の嬖を史官わ 嬖はいやしくして愛をあつる者なり 和保ゝ小姓なり
衛の法に寵を天の車に乗るの人刖
ふと云て彌子瑕彌子母病人報彌子に告彌子
矯て天車に乗て以て靈公に告てこれを賢として
のゝふか者なるれ母の為に故に刖足を犯と又或日

靈公と果園に遊ぶ桃を食て其さはりの盡すして
こゝまで靈公に喰しむ靈公のまゝく我と共すこれ
甚口に味ふこと絶忘れ次て寵人に喰しひと陰よりこ
喪へ出て絶るに及で飛と靈公に奏らるゝ公のまゝ出て
西とに首て吾車と矯まし家に喰しひとに餘の桃
を以てすゝもれ大逆不敬なりとして法の赦なるゝ事を

孫叔敖　小学

周の代乃東孫叔敖性に善名ハ楓叉父と善賈とハ
楚王ハ人なりわが子ハ出く敖よ為の蛇とゝる而敖
して是を埋て憂ゝ色ゆゝこと母ハ是と問叔敖が
いとく吾ゝ為の蛇とゝる老ハ死すと家今見とゝる

恐くハ親ハ事ること絶ゆるこ
んと母のいとく蛇今安ゝ結
叔敖ハいとく化人の又こんの
と為く敖て見と泣と母乃
いとく子ハ涙人ハ為ハ性ハ
害なゝんと果して涙く長
命ゝく後ハ花ハ品ハ
楚王ハ改乃とつゝさゝのゝ
に治りていよく皮爵祿
ハ富て十世に及べゝ絶ず
ゝとなわ

卞莊子　四書故事

魯の卞莊子い書叔振鐸ゝ後卞邑の大夫さわ性勇を好ま武ゝ故乃虎に遇ゝ毫と刺あろさんと欲す管豎子ゝいふ者ゝ是れを止ていゝく虎猶さに牛と食んとす必爭ふゝ勢ゝ必ず大ゝ傷ゝ小ゝ傷ゝ亡ぶ傷ゝ待て刺ゝ一ゝ刺ゝ双ゝ虎ゝ全ゝ是れ卞莊子ゝ於ゝ勇ゝ果ゝ敢ゝ聞ゝ孝ゝ母ゝ慈ゝ母ゝ死ゝ時ゝ三ゝ度ゝ合戦ゝ出ゝ戦ゝ三ゝ度ゝ敗ゝ走ゝ母ゝ既ゝ死ゝ及ゝ魯ゝ攻ゝ齊ゝ成ゝ卞莊子ゝ進ゝ戦ゝ死ゝ乃魯ゝ軍ゝ見ゝ敗ゝ卿母ゝ虜ゝ是ゝ以ゝ三ゝ度ゝ北ゝ吾ゝ是ゝ辱ゝ思ゝ

母渡しぬるつぐなうと責めと塞がんと遂に敵ふ能はず甲の首をはねくまれを献じていくばくかの一度び北を落ぬ入て一甲乃首を獲てこれを獻じていく此身北を塞くと又入て一甲乃首を獲てこれを献じていくこれ三度び北を塞くと將軍こを功状上て語て乃人者とかん下莊子がいくく三度び北て以て母を養ふ是乃乃史今乃士は節小具みて責を塞く吾これを守る節士は以て生を辱しめんと遂まうけがたしといへり

預基

薫門伯部源の弘基延喜帝乃曾孫西の京乃太府卿明公の孫亞相俊賢のすなわち後一条帝の事へ碩砌

中納云と號す児雅ふれて字を好こと長て大学に遊び才と文藝ふ能といへども志と林泉に據しひ賞て言ていくく月光花ふくしてあれをえんこ吾秋知りと好愛と削く大原山ふ遁こと預れ第廣と造びふと安て壽を預とたわ

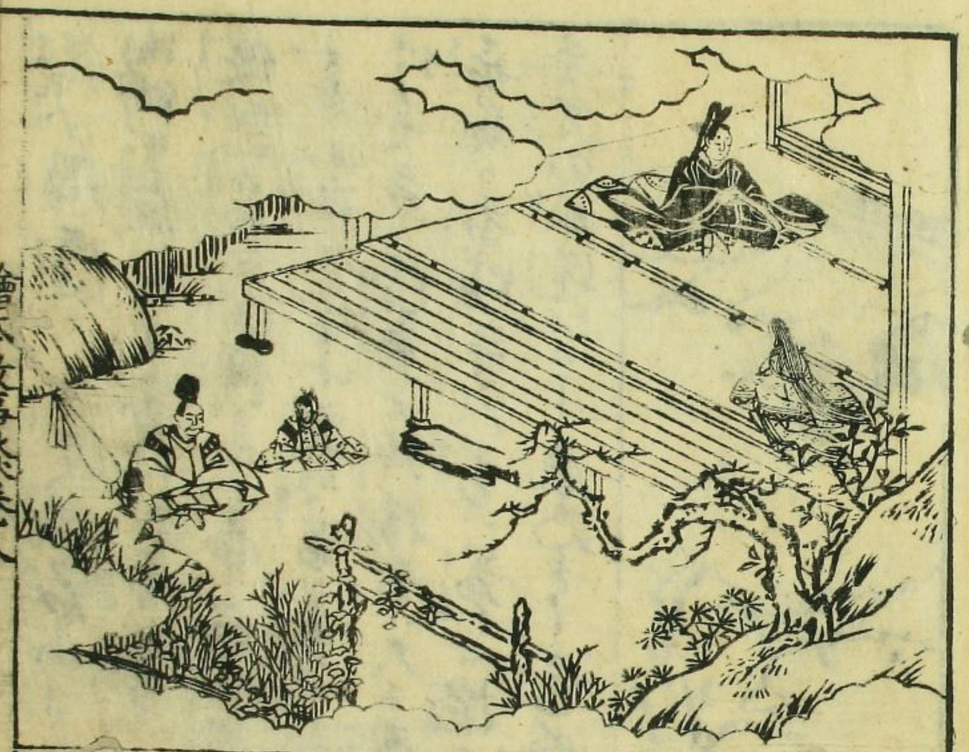
青砥左衛門

金子校尉まゝ砥と茂綱小余良時ふ仕小良時茂綱ゝ命て箱根相湯の地数十所を治しむこゝろ用て資財を費ゝ紙ども殺すに綿布を以一飯する事ゝ焼塩を用ひて儉素を旨とすと多くは類し私の為ゝ用ゝに後らゝ公乃為ゝ財を蓄まゝ怠

仁わ多く人を恵ゝ飢餓の老人を見ては飯食と與へ貧苦乃老ゝ法布と與ふ或時茂綱偶ゝ出行す途中に河わ滑川といふ所れと渡るに及てを渡去る者の袴よりて十銭を河中に投ゝ茂綱急ゝ馬を引返して松明とゝくれを照し銭を水底よりて拾ひ後ゝ人わ来て問ふ何ゝ為ゝ銭を捨ゝ人わと茂綱答て曰ふ利ゝ為ゝ世の費とを捨ゝ又民を恵の不仁を慮ゝ十銭と失ひて百捜ゝ拾ゝ永く滑河ゝ流す人家接する者の民乃利ゝ為ゝ多の十銭も亦世ゝ存する者ゝ民ゝ一つとも失ゝ豈守国の利ゝ非ずや此事

紫式部傳

紫式部は右京大夫藤原為時が女なり聰敏みて、和歌を
嘗て後堀河後濱城帝に奉れるに宿仕す嘗て殿上
に圖書寮の陸子とて言事ありて勅勘の
忠臣孝子を撰び非の如くあれと書
せれ共も亦古昔の人わらすべうく勅勘すべし
されと撰ぶの代なれとも上はれと定め大
感嘆わりて女位とす紫式部結句辭して肯て受
納しなかりしかは邑に幽居
長心帝に奉て昔日星夕の歌を云
よ及て是を揚くまれと咏きしかは紫式部結句を獻

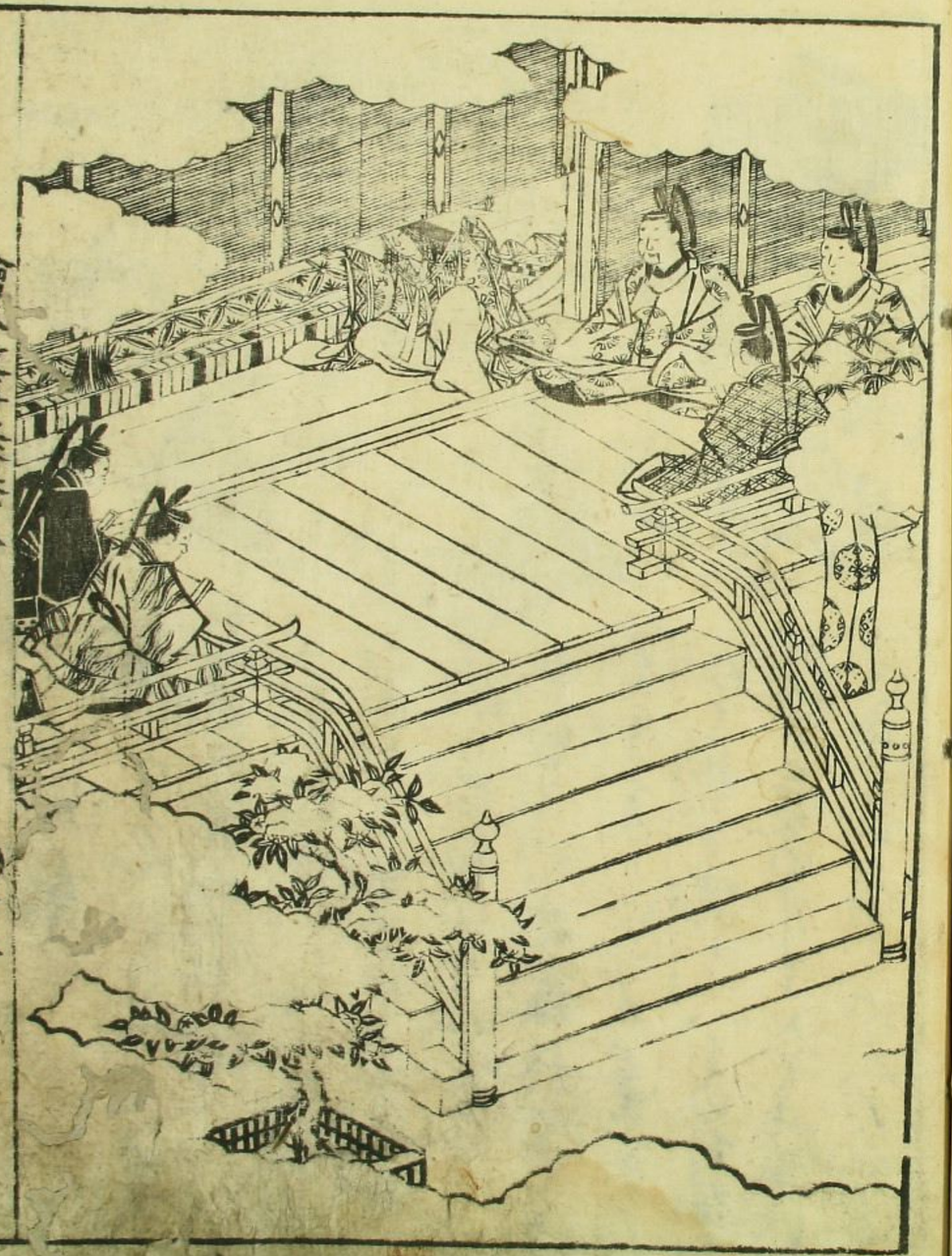


そのかよいてく
あさまくもこそ
うぐのせどれはセタ
つあに何とそ海し

清少納言

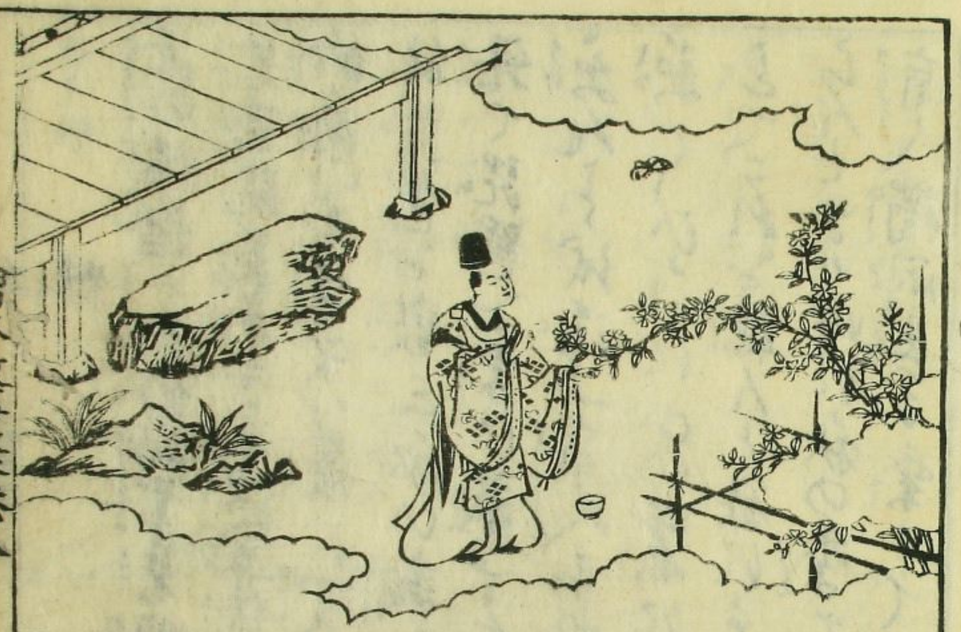
清少納言云、紀淑望清
原の元輔の女なり元輔
父を泰光と云泰光
父は深養父と云全人
紀貫之の孫なりわれ
と以て家と世の人

清女（紫式部）天資才名みなく山に秀でゝ一條帝に
仕時皇后文子宮仕す帝常て紫宸殿に陞給ひ
偶然雪大に積り帝新詩を賦ひて香爐峯の
雪いかゝとのたまふ清女答て簾を卷て
ながめて立て詩篇を誦し是を仮のふ蓋白
居易の香爐峯を撥て看といふ句をこゝろ
ゑ才の敏速なること是時清女清秋門に侍ける



爲憲

源の爲憲は光孝の御孫なり帝四の子なりこの
ゑを光恒といふ光恒子ゑを爲
ちといふ爲憲の子を忠幹
といふ忠幹の子爲憲なり文
章生なりし應徴時なり
文舎有ことに一乃嚢を携
以て逃き偶走へよの句有
訳と嚢の中より入て此歌に
るの言久し他人の詠な



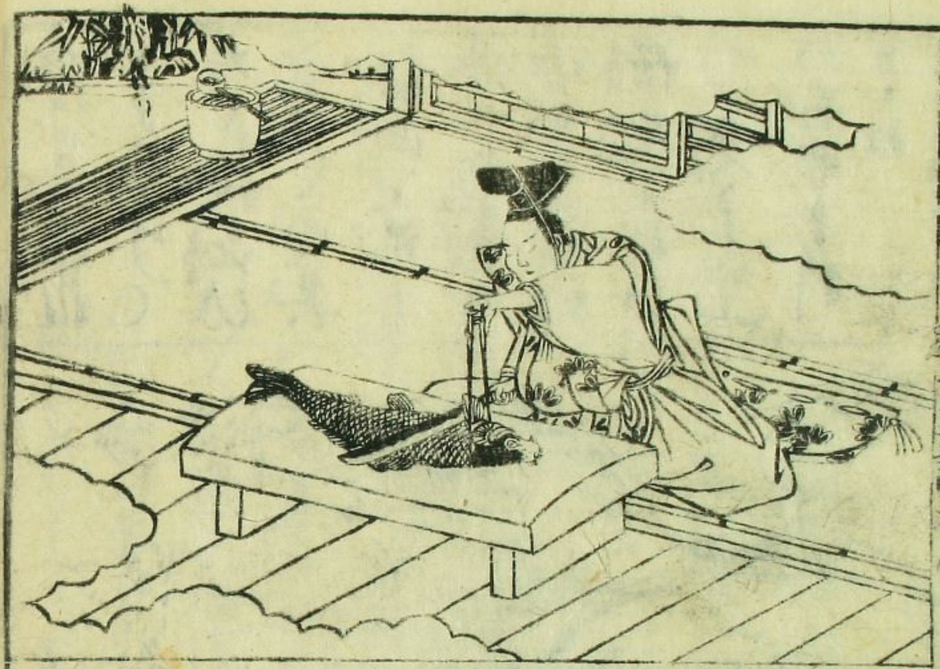
花園

太江の佐忠いまだ出仕
せざりしを花を見て蓋物
賦を以てこれを命ずと義すり
と数なり偽ふ佐忠浸浸
そこ夢らく亡父化して姉妹
とあり来て花園より出ふとそ
子追慕すに堪ざる花の
花房に蜜を塗て親族
枕も赤絵り爵に正に位下位
馬寮に乗り又幸にちよ位下

情雅

深の情雅ハ長沙尚書克明大王の子延年の孫史
業莊院業平三年淳五位下に叙し後三位に昇る
城南の末憶山乃麓に一乃盲人あり素貧窶みく
琵琶を敷三絃の調を知り情雅乃ち盲人に
就て琵琶を学ひ業すでに精し頻りに秘曲を
学んと欲す盲人これを許さず情雅ひとり
秘くひそかに山の禁に伏して
聴てこれを聴んと欲ひ蔵の中に伏く
らんとすり時に秋の季夜嘯たつに風月清明なり
盲人獨閑裏に楽しんで偶琵琶を弄て彼三曲を

弾ぜり情雅
これを学て
大ひに喜ひ
こくく甚
秘曲を記し
ひろ成り
いしく情雅
蟬丸まあひ
て受ることを
いかやまれ
なり



碁氏

茂原の碁氏ハ父ハ中納云碁家母ハ白梅ゝ有り帝都堀河の邸ゝ社人参議に任じ一子を家號を園ゝ以ふ四条帝乃時ゝ及ひて辭表を上て判奏して名を家空といふ當時樣して五羽の鹿丁着ありと以ふ業て自殺をなして羅魚とそうと一百日ふ及とそ

生駒記

生駒の記い指別位者数の人なり河内乃国安の東山ゝ入て深谷の中位ゝ在ると寛平九年丹多川門的遠山元絶頂ゝ到り深谷をこれて苔蒸ゝ為ゝ迷てこれハ一人ゝ在ると鼠色黄色の如し頭ゝ白帽と戴き身に白衣をと忽ち明逢問て曰推ゝ乃ゝ之に答曰家ゝこれ生駒の他人なりと

伯乃道恭　列仙伝

毛伯乃劉乃恭謝雅
堅兆期ハ皆後漢の代
乃人なり同くむ屋山に
入て道を学ぶこと四十
餘年ニ神丹を合て
伯乃先服して死す
乃恭先を服して死す
雅堅兆期わ(ハ)て服を次
業を辛て神いまこゝに
出さるに遂ま伯乃道

恭各白鹿ま乗て空
中に行とたゝ二人先と
悔て後、遂ま仙術を学ぶ。

逍丙　同上

後漢の逍丙ハ東陽の
人なり仙を学ぶ術を知
或ハ水を飲て酒とし一
物を削て脯しし亢を
解肥しむ又後漢ま光
武を求るに得されい乃
牽を水ま布て後ま

狄仁傑　太平廣記

唐の代加州の人狄の木の下に
嘗て夏の天熱に苦しみ雷の
ごとくなる音を樹上に落かを
樹すでに裂くこと雷公の如
烈なる樹を裂て吼ること霹靂
震のごとく狄乃ち狄人
恐れ色を失ひ狄仁
傑と云賢才の人なり代加
の都督に自任て見こと
に雷公乃いとく命天帝に

乖ことを有て此樹の為に夾れ
厚く恩を報いんと狄仁傑に
公方に出ること伐ひく雲と裏して天より遣れる雷
累進して梁國公に封せられ賢徳を以て文恵公と謚る

梟逢鳩　説苑

梟あわ鳩に逢て鳩にいとくちんち安へ之梟にいとく亦
まさに東のかたに法んとして鳩にいとく何の故に梟にいと
くに人当家の鳴を惡て故と以て東に法て鳴にいとく
ちんちくなることを更い可らん鳴を更ることあること以て東に
法ても於ちんちの変と惡まんといへり此に人の亦過
を更されいつくへ以ても人の惡むといふなわ

攝陽江東畫者

後素軒橘有稅

うれ畫のうい四乃歌のひとはう
しあ染と先とのの君ゑ寸鶯英
さ所さをくさ色さ所うありめ色安四く
ものいとあ初めく八所を生ゑ丹
い海ゑうの高ゑをいうゑ安しもいゑと
あうとにされを代乃ゑ安さうあに
行海まつなくく歌特ェちゑむ分
ゑも梁ゑも見ん世ちんうしゑ

二年正月廿五日、ひがしやまのの
みくるまをくるまにかけて、
四月のはじめ、ほとゝぎすのこゑ
さうのもとにあり、
くふみをかくのまに、
なりくるしいて、
ものをかきたるに、
ゆうまをもうまして、

とゝめをのこす、
さゝしのぶ者なし、
手を求て畫図うつくしを得たり、
かくて、
西湖の酢をおひ、
たゞひとり、
うゞくるなり、

用例は西鶴の作法に倣ひ
諸と名づけ此所にて
四のとく　藤屋深庵のもとめ
治章　陳人山水序周書

臣煉
治理

大坂心齋橋筋北久太郎町
剞劂　吉田五郎右衛門

全本繁多故分之為南編而令所願者
編之於後編之俟来日而令刊出也

正德四龍集甲午林鐘穀旦

書肆
江戸日本橋南壹町目　須原屋茂兵衛
大坂心齋橋安堂寺町　大野木市兵衛

早稲田大学図書館
011688990779